

目次

亡者の金

5

訳者あとがき 282

解説 横井 司 285

Dead Men's Money  
1920  
by J.S.Fletcher

## 主要登場人物

- ヒュー・マナーローズ……………弁護士事務所の事務員  
リンゼー……………弁護士。ヒューの雇用主  
メイシー・ダンロップ……………ヒューの婚約者  
アンドリュー・ダンロップ……………食料雑貨店店主。メイシーの父親  
ギルバート・カーステアズ……………第七代準男爵。ハザークルー館の当主  
マイケル・カーステアズ……………ギルバートの兄  
アレクサンダー・カーステアズ……………ギルバートの父親。第六代準男爵  
ホリンス……………カーステアズ家の執事  
ポートルソープ……………カーステアズ家の弁護士  
エルフィンストーン……………カーステアズ家の元執事  
ジェームズ・ギルバースウエイト……………パナマ帰りの元船長  
ジョン・フィリップス……………ギルバースウエイトの知人  
ギャビン・スミートン……………代理商  
アベル・クローン……………釣具屋の店主  
ナンス・マグワイア……………クローンの家政婦  
マレー……………警察署長  
チザム……………巡査部長  
セプティムス・リドレー……………教区司祭

## 第一章 眼帯の男

僕が知らぬ間に巻きこまれていた、他に類を見ない悪逆無道な事件の発端は、改めて考えるまでもなく、いまから十年前のあの春の宵のことだ。あるとき、イングラッド最北の町、ベリック・アポ  
ン・ツイードの目抜き通りに面した客間の窓から外を見ていた僕は、わが家の前に立つひとりりの男に  
気がついた。左目に黒い眼帯をつけ、古びた肩かけブレイドをゆるく巻き、右手に太いステッキと時代が  
かつた絨毯地の旅行かばんをさげていた。ほぼ同時に、僕に目をとめた男は、機を逃さず、わが家の玄関  
へ近づいてきた。当時の僕にうわべ以上のものを見抜く能力が備わっていたら、こちらへやってくる  
男にびたりと寄り添う強盗や殺人者や悪鬼の影に気がついたらはずだ。だが、実際のところ僕にわかっ  
たのは、その男がよそ者であることだけだった。僕は窓を開けて用件をたずねた。

「部屋だ！」ドアの上の小窓に母が掲示したばかりの貼り紙を、男は太い親指でぐいと示した。「部  
屋を借りたい！ 独り身の紳士向けがあるそうじゃないか。わたしは独り身の紳士だ。しかも下宿先  
を探している。滞在期間は一カ月か、もう少し長くなるかもしれない。宿賃はいくらでもかまわん。自  
分で言うのもなんだが、理想的な下宿人だぞ。あれこれ世話を焼く必要はないし、無茶な要求もしな  
い。もめごとはまっぴらだ。さあ、なかへ入れてくれ」

僕は客間から出て、玄関のドアを開けた。無言で敷居をまたいだ男は、重からだそうな身体を左右に揺ら

しながら——恰幅のいい鈍重な動きの男だった——僕が招き入れる前に、ずかずかと客間に入ってきた。旅行かばんと肩かけとステッキを脇に置き、僕に目を向けたまま、うめき声を漏らして安樂椅子にどざりと腰をおろした。

「で、おまえさんの名前は？」たずねる口調は尊大だった。まるで世界じゅうどこであろうと、他人の家に上がりこんで質問する権利が自分にはあると言わんばかりだ。「いずれにしろ、まだ嘴くちばしの黄色い若造だな」

「ヒュー・マネーローズです」答えながら僕は、この男に調子を合わせても害はないだろうと考えていた。「下宿のことを知りたいなら、母が帰ってくるのを待たなきゃなりません。出かけているんですよ、この通りの先に用事がある——じきに戻ってくるはずですよ」

「べつに急ぐ話じゃない。のんびりしたもんだ。ここは居心地のよさそうな港町だな。騒がしくないところがいい。ときに、お袋さんは未亡人なんだろう？」

「ええ」

「おまえさんのほかには——弟や妹は——いないのか。よもや、この家に小さな子どもはおらんだろうな。わたしは子どもが嫌いなんだ。我慢ならん。近くに寄ってこなけりゃいいが」

「僕と母と、それに若い女中がひとりいるだけです。あなたが静寂を求めているなら、ここはうつつけの場所ですよ」

「静寂はまさしくわたしの求めているものだ。ここは雰囲気もいいし、静かだし、申し分ない。このベリックという町で、ひと月過ごすにはもつてこいの宿だ。ことによると、もつと長くいるかもしれない。実に居心地のいい、いまのわたしにふさわしい町だ。いいか、若いのが、風変わりな異国の地をい

やというほど見てきた年寄りにとつて、安寧や静寂は、肉や酒に匹敵するご馳走みたいなものだ」

たしかに彼は、風変わりな異国の話を聞かせてくれそうな、節くれだつた切株みたいな男だった。顔だけでなく首にも無数の皺しわが刻まれ、髪はおおかた灰色。そして目は——眼帯をつけていないほうの目は——生まれてこのかた警戒を怠つたことがないかのような鋭い光を宿している。筋骨たくましい身体は見るからに屈強そうで、僕に話しかけながら腹の上で握り合わせた手は、他人の首を締めあげられるくらい、あるいは、子牛を殴り倒せるくらい大きい。それ以外に目についたのは、両耳に光る金のイヤリングと、ベストを横切る太くて重そうな金の鎖飾り。真新しい青いサージのスーツは、ごく最近、既成品を扱う店で買ったものらしく、いまひとつ身体に合っていないかった。

その見知らぬ男の言葉に僕が応じる前に、母が音もなく客間に入ってきた。礼儀やマナーを重んじるタイプらしく、男はすぐさま立ちあがり、うやうやしくお辞儀をした。そして紹介されるのを待たずに、母に向かって弁舌を振るいはじめた。

「お邪魔していますよ、奥さん。この家の女主人——マネーローズ夫人ですな。実は下宿屋を探しております。通りすがりにお宅の貼り紙と、窓辺に息子さんの顔が見えたものだから、なかに入れてもらつたんです。わたしが求めているのは、ひと月ほど快適に過ごせる静かな部屋、それと簡単な食事、凝つた料理は必要ない。それから宿賃については——いくらでも結構。言われたとおりの額をお支払いする。前払いでも、何払いでも、そちらの都合のいいように」

父が他界してからというものの、小さな身体で家を切り盛りしてきたやり手の母は、口もとに笑みを浮かべて、その下宿希望者を上から下まで眺めまわした。

「まあ、気前がよろしいのね。部屋をお貸しする前に、どこのどなたか聞かせていただけるかしら。このあたりの方ではなさそうね」

「この町を最後に目にしたのは、いまから五十年前。当時、わたしは十二かそこらの小僧だった。それはさておき、わたしがどこの誰かと言うと、名前はジエームズ・ギルバースウエイト。かつては世界屈指のすばらしい船を操る船長だった。性格は物静かで礼儀正しい。大声で悪態をついたり、酔っぱらって騒いだりしない。つねに沈着冷静だ。そして、さっき言ったとおり、金に糸目はつけん。いつでも即金で払う用意がある。これを見てくれ」

男はそう言つて、ズボンのポケットから大量の金貨を無造作につかみだした。指を開き、黄金色に輝くてのひらをこちらに差し出す。儉しく暮らしていた僕らにとって、それは目を見張る光景だった。男の手の上で山をなす金貨。しかも当人はその金に無頓着で、六ペンス硬貨の山ほどにも興味を持っていないようだ。

「ひと月分、好きなだけ取ってくれ。心配には及ばん。金はたっぷりあるんだ」

しかし、母は笑つて金をしまつように身ぶりで示した。

「いえいえ、そうではなくて、あたしはただ、わが家にお泊めする方の素性をうかがっているだけです。この町にしばらく滞在されるのは、お仕事の関係で？」

「一般的に言うところの仕事ではないんだがね、奥さん。この近辺にわたしの親族が眠っている墓がいくつあつて、そのひとつひとつを訪ねてみたい、ついでに彼らが住んでいた古い町を歩いてみたいと、そう思ひましてね。そのあいだの逗留先として、居心地のいい静かな宿を探していたわけです」

男の感傷的な弁明が、母の心の琴線に触れたのが僕にはわかった。みずからも墓地を訪れるのが好きな母は、ジエームズ・ギルバースウエイトに向かって黙ってうなずいてみせた。

「では、さっそくですけど、宿泊設備の面で何かご要望はありますかしら」母はそうたずね、いま話している客間とその真上に当たる寝室が男の居住スペースであることを説明した。細かな取り決めを交わすふたりに残して、僕は自分の用件を片づけるべく、べつの部屋へ引っこんだ。しばらくすると、そこへ母がやってきた。「あの人に部屋を貸すことにしたわ、ヒュー」母の声は明るく弾んでいた。金に糸目はないというあの男の言葉に偽りはなかったのだろう。「見た目は大きな熊みたいけど、実際は寡黙で、礼儀正しい人らしいわ。それでね、あの男、駅に衣裳箱を預けてあるんですけど。これがその預かり証。だいぶお疲れの様子だから、誰かを取りに行かせてくれないかい？」

そこで僕は、小型の荷車を所有する近所の男を訪ね、預かり証を渡して駅へ取りに行かせた。しばらくして男が戻ってくると、持ち帰った荷物をギルバースウエイト氏の部屋へ運びこむのに僕も手を貸さなければならなかった。その木製の衣裳箱は、かつて見たことも触ったこともないような代物だった。駅へ取りに行った男も初めて見たという。黒っぽい木材は非常に硬く、四つの角は真鍮しんちゆうの金具で補強され、底に鉄の棒が二本渡してある。たかだか二・五フィート四方の木箱だが、二階へ運ぶのは骨の折れる仕事だった。ギルバースウエイト氏の指示に従って、僕らはそれをベッドの脇の頑丈な台の上に据えた。その衣裳箱はずっとそこにあった——だが、いつまでそこにあったのかを言えば、話の成り行きを先走って明かしてしまうことになる。

こうして、わが家の下宿人となった彼は、前言に偽りのないことを証明した。寡黙で礼儀正しく、酔って醜態をさらすことも、面倒を起すこともない。毎週土曜日の朝食時には、決められた宿賃を

不平も疑問も言わずにきつちりと払う。毎日の過ごし方は判で押したように同じ。朝食後は決まって外出する——埠頭や苔むした城壁（ペリックの町の中心部をぐるりと取り囲む中世に建造された石の壁）を訪ねたり、ボーダー橋を歩いて渡ったり、ときにはツイード川の対岸（ツイード川の対岸はスコットランド）まで足を延ばすこともあったようだ。僕の母と特別な取り決めに交わし、夜には特製のデイナーを食べる。大食漢で、口の肥えた彼は、贅沢な食事を心ゆくまで楽しんだ。そうやって一日を締めくくったあと、葉巻と酒の入ったグラスをお供に、一、二時間かけて新聞に目を通す。彼は一貫して紳士的な態度を崩さなかった。つねに丁重で礼儀正しく、毎週土曜日には、好きなものを買いなさいと言って、わが家の女中に半クラウンを渡すのを忘れなかった。

とはいうものの、ギルバースウエイト氏にはやはり謎めいたところがあった。僕らがそのことをはつきりと認識したのは、あとのことだが。彼はこの町で知り合いを作ろうとしなかった。埠頭や城壁の周辺をぶらぶらしているときも、船積みの作業を眺めているときも、誰かと短い言葉を交わす姿さえ見られなかった。居酒屋（食事や、ときに宿泊も可能）には一度も立ち寄らず、誰かを部屋に招いて酒や葉巻を一緒に楽しむこともない。初めて彼宛ての手紙が届いたのは、わが家での下宿生活を終える直前のことだった。

一通の手紙と事の終わりは、唐突にやってきた。ギルバースウエイト氏の滞在期間は、本人が最初に予告していたとおり、すでに一カ月を超えていた。彼がわが家に来てから七週目、六月のある晩のこと。夕食時に帰宅したギルバースウエイト氏は、外出先でにわか雨に遭ってずぶ濡れになったと母に愚痴をこぼした。翌朝、起き抜けに激しい胸の痛みに襲われて、話すことさえままならない彼を、母はベッドに寝かしつけて介抱した。その日の昼に彼宛ての手紙が届いた。わが家に滞在中に届いた、

最初にして唯一の手紙は、書留で送られてきた。配達されてすぐに、彼の枕元へ持っていったのは女中だった。あとで聞いたところによると、彼は手紙を見て、一瞬、驚きの表情を浮かべたという。しかし午後のあいだ、彼は母にも僕にもその手紙のことを言わなかったし、夕方になって僕を部屋に呼び寄せたときでさえ、話題にすることはなかった。とはいえ、すでに女中から事情を聞いていた僕は、呼ばれたのは手紙と関係があるのだろうとなかば確信していた。僕が部屋に入っていくと、枕に寄りかかっていたギルバースウェイト氏は、まずは身ぶりでドアを閉めさせ、それから近くへ来るように手招きをした。

「ここだけの話」かすれた声で言った。「折り入って、おまえさんに頼みがあるんだ」